

出席者 山路純正 五十嵐靖雄 伊藤弘隆（部会長） 服部直哉（副部会長）

西川光典 田中清元 荒井裕明（書記）

（欠席者 名村直高 酒井秀瑞 大庭諱道 梅本実道）

今回の四部会は、令和3年1月18日19日以来の開催となり、社会部会は「信仰」について議論するが、その中心テーマは ①寺院の統廃合 ②後継者問題 ③檀信徒との関係維持と教化施策である。

まず、伊藤部会長が出席者全員にこれらのテーマについて自由に発言を求めた。

- (1) 過疎地における寺院では後継者の養成が難しくなっている。後継者の教師分限の取得条件について議論を進めるべきである。
- (2) 現在住職不在の寺院で、兼務のままで良いと考えている総代もいる。少ない檀家数で住職の生活を支え、伽藍の修理を行うことは難しいというのが理由である。このような現状を承知しておく必要もある。
- (3) 過疎問題に限定せず、この時代にどういう人材が必要なのか明確に示すべきである。教団としてどのような構想を描いているのか分からない。この点についてしっかりとした議論がされていない。
- (4) 四部会の共通テーマである宗門のブランディング事業について。曹洞宗の信仰とは何か、明確に示すことが大切である。それによって宗門の認知度が上がる。
- (5) 宗費の使途をしっかりと考えるべきである。膨大な固定費や檀信徒会館の運営等に宗費の多くが充てられているが、今困窮している寺院に対して如何に手を差し伸べるかが重要である。過疎化対策や自然災害の保険等、地方寺院のために宗費を有効に使うことが包括法人の役割である。
- (6) 後継者問題について。兼業をせざるを得ない寺院の後継者は長期間の安居修行は困難である。教師分限取得のあり方を見直す必要がある。檀信徒との関係維持と教化施策について。現在の檀信徒の施主世代は高齢化している。葬儀や法事に対して次世代の方々の認識は希薄になりつつある。住職として葬儀や供養の意義、信仰の大切さを分かりやすく伝え、檀信徒との関係を強化する努力が必要。
- (7) 僧侶の人材育成は極めて重要と感じる。檀信徒に対する教化布教がしっかり出

来て、菩提寺住職として信頼を得ること。それと共に、坐禅会などを通して檀信徒がお寺に来やすい環境を作る。

- (8) 宗門が過疎地域の寺院を会場として坐禅会などの行事を企画して人を集めることが過疎対策につながる。

上記の意見交換を以って前半を終了。10分の休憩を挟んで、後半は、今必要な人材としての僧侶像について議論することに決定。

- (9) すぐに必要なのは、宗費の減免と過疎地寺院の対策をしっかりと考えて、宗費を適正に執行出来る人。長期的には、坐禅修行をしつつ檀信徒の教化を行える人。この点を兼ね備えた人材が最適であるが中々難しい。

- (10) 檀信徒からどこの僧堂で修行したかを質問される事がある。僧侶は厳しい修行をしないと成れない特別な存在と捉えられている。そして、住職として檀信徒のために寺を守ってくれていると感じている。その様に見られていることを意識すべきである。

- (11) 特にコロナ禍で困窮している現在、地方寺院と檀信徒に対して宗務総長からお見舞いや支援のメッセージを積極的に発信すべきである。中央から地方への情報発信は必要。情報が無いと地方の寺院は中央の動静が分からない。

- (12) 社会の変化に合わせた各寺院からの情報発信も重要。若年層にはYouTubeなどで法話を聞いてもらい、お寺と交流する機会を作る。コロナ禍のためリモートで施食会法要などを勤める寺院が増えているが、リモートでの法要も先祖供養を営む際の選択肢の一つとして檀信徒に提案できるのではないか。

兼業を必要とする寺院の後継者にたいして、就職活動に支障が出ないような修行期間の設定を考えるべき。

- (13) ある地方の宗門関係提供のラジオ番組が費用対効果の採算が取れないため終了した。その番組はわずか5分の放送だったが、今人々が求めている僧侶像を知ることの出来る貴重な番組だった。地元の若い僧侶たちは真剣に聞いていた。聴取率が低いからという理由で番組が打ち切られてしまったことは誠に残念だ。社会の声に真摯に耳を傾けるべきである。

- (14) 情報発信と言うがそもそも何を発信するのか。

- (15) 特派布教会で曹洞宗の教義を説くと高齢者には「ありがたい教え」として受け入れられるが、それは今の社会に対応出来ていない。布教は今の人々が何を求めているのか理解して初めて受け入れられる。内向きの発想では社会の変化

に対応出来ない。

- (16) 宗派の教義を説く従来の布教はほとんど効果がないという調査報告が他の宗派から出ている。これは深刻に受け止めなければならない。宗門の特派布教は何を布教の内容として説くのか明確にするべきだ。
- (17) 曹洞宗管長からのメッセージを檀信徒に伝える意義は大きい。コロナ禍や自然災害など状況に即応したメッセージを発信して欲しい。
- (18) 高齢の親を持つ檀信徒は今後の菩提寺との対応に不安を感じている。そのような檀信徒の思いをリサーチして、必要な情報を宗門から発信するメディアを構築する。
- (19) ターミナルケアやグリーフケアは、死に直面する人たちに救いの手を差し伸べることであり今必要とされる活動であるが、この問題に関して宗門で議論されているのか。また、例えば「お寺の未来」という一般社団法人が「未来の住職塾」を運営しているが、このような活動に我々はもっと関心を持つべきではないか。
- (20) 住職は聖職者と経営者の二つの役割を一人で担っている。そこに住職の任を全うする難しさがある。今求められる僧侶の役割は、ホスピス病棟の末期患者さんとの対話やホームレスの方々の支援活動など、自ら進んで社会と関わらなければ見えてこない。それと共に様々な手法による広報活動にもっと予算と人材を投入して強い発信力を持つことが宗門の布教教化に必要と考える。

終了予定時間となったため、以上で議論を打ち切ったが、各部会員からは更に議論する機会を作って欲しいとの要望があった。また、社会部会として今後宗門の広報活動の強化について議論すべきとの意見もあった。

以上の議論のまとめとして、社会部会は次の3点を提示する。

- 1, 過疎化対策として宗費の減免を行う
- 2, 過疎地寺院の後継者育成のため、教師分限の取得をどうするべきか、また、宗門や檀信徒が必要とする人材育成について議論する
- 3, 宗門から地方寺院及び檀信徒に積極的にメッセージを発信する